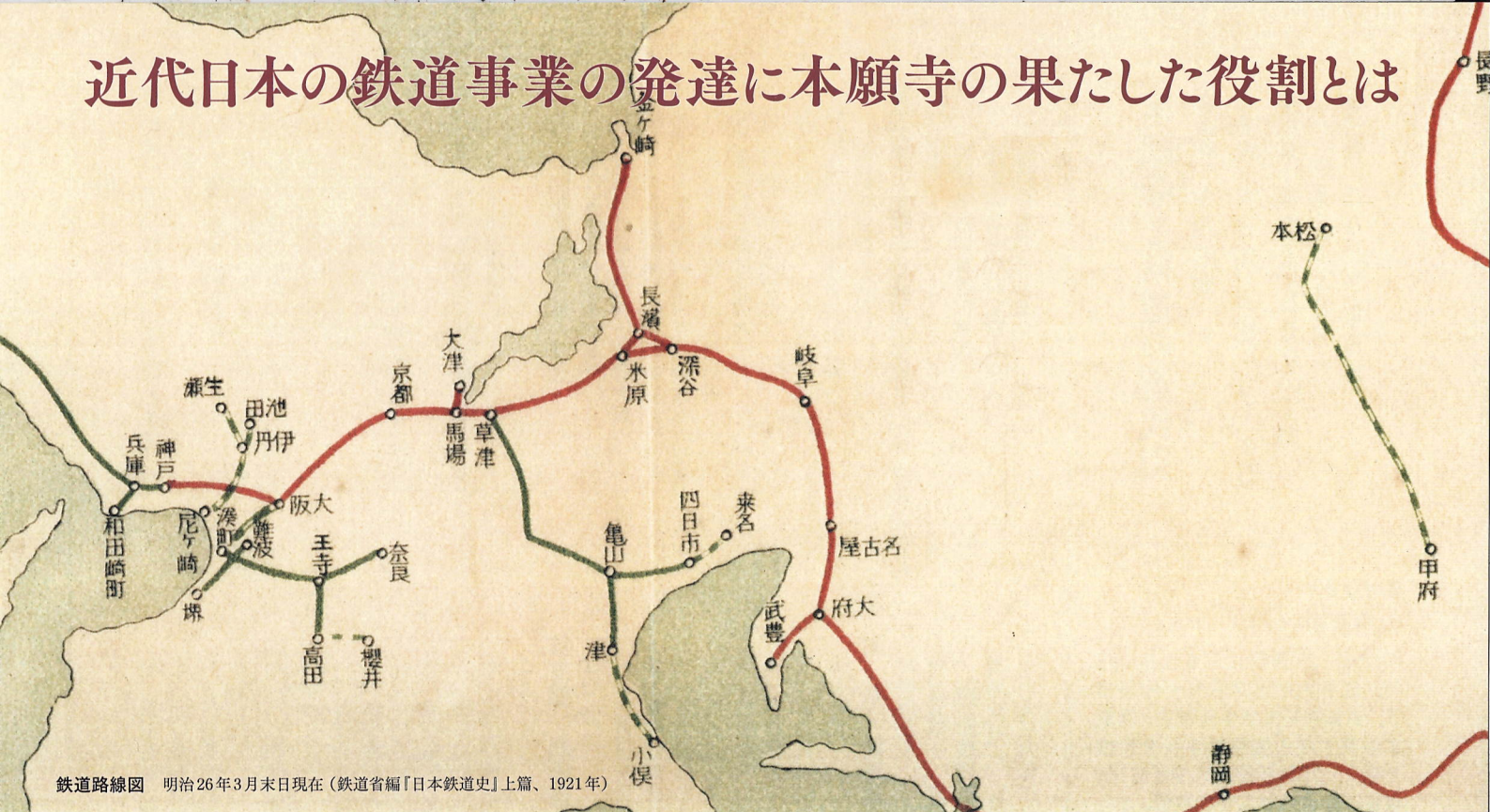


近代日本の鉄道事業の発達に本願寺の果たした役割とは



日本近代の鉄道発達に本願寺が果たした役割の大きさ、
鉄道布教に集約的にあらわれた近代真宗の社会的実践・
教化事業に関して、その実態を明らかにした。

中西直樹 著

本願寺と 鉄道の近代史

刊行の言葉

近代日本の鉄道事業と仏教との関係はきわめて深い。戦前期の鉄道敷設工事や鉄道運行に際しては、多数の死者を出す大事故が頻発した。これら死者の追悼供養を行うことは、鉄道事業を継続していく上で不可欠であり、鉄道経営側は追悼法要の執行を仏教側に期待した。また観光旅行がそれほど一般化していない状況で、寺院参詣の乗客は鉄道会社の大きな収入源であった。一方、鉄道の普及は、本願寺参詣のあり方を大きく変えた。鉄道整備がすすんだ1895年(明治28年)以降、大規模な法要が次々と執行され、多くの参詣者が集まり、門前は異様な熱気に包まれた。さらに日露戦争後、鉄道国有法が公布され、内閣直轄の鉄道院(後に鉄道省)が設置されると、鉄道院との間で綿密な輸送計画が立てられ、団体参詣もはじまった。本願寺の法要は、京都に多数の参詣者・観光客をもたらした。東京遷都により衰微した京都を観光地として経済的に活性化させる上でも、大きな役割を果たした。



A5判・上製・314頁
本体4,800円+税
ISBN978-4-86691-591-3

三人社